百年代理店 かく語りき

モリ保険事務所（創業大正7年）第2話

激動の戦後、地域の発展と衰退の中で

職人かたぎに徹した2代目森良雄氏

チャネル情報

昭和36年、チリ津波に襲われる

太平洋戦争を乗り越えてきたモリ保険事務所だが、初代の庄治郎氏が昭和36年（1961年）、急病により帰らぬ人となった。それは、チリ津波で気仙沼が壊滅的被害を受けた翌年だった。チリで発生した津波は約1日かけて気仙沼に到達した。ほぼ不意打ちに近い状況だったという。

当時の様子が「目で見る気仙沼の歴史（気仙沼ライオンズクラブ）」に記されている。「鹿折地区では鹿折川を逆流した津波が、四十㍍くらいの漁船を押し上げたり、太い丸太で、工場、住宅がつぶされたところもある」という。モリ保険事務所と母体の罐詰工場があった鹿折地区では小型のタンカーが岸に押し上げられたという。東日本大震災でも鹿折地区には共徳丸という巨大な船舶が乗り上げ、事務所や住宅をなぎ倒している。津波は、幾度となくこの町を襲ってきたのだ。

跡を継いだのは、2代目となる森良雄氏だった。初代庄治郎氏の急逝により代理業を引き継いだ良雄氏だが、当時はまだ保険という文化のない時代だった。気仙沼はモータリゼーションの波もまだ押し寄せてはいなかった。

2代目の森良雄氏

気仙沼市史で気仙沼の自動車の歴史を振り返ると、この町に自動車が出現したのは明治末期ごろだと伝えられている。ドイツ式散歩用二人乗り自動車の試験運転が開始され、いったんは成功したものの、次の試運転で故障し、当時は気仙沼で修理ができず失敗に終わったという。

大正期に入って乗合自動車が導入されるが、初期の段階ではその数は、まだ1～2台程度で運賃が高く、事業は結局失敗している。事業として動き出すのは大正末期ごろからで、本格的に自動車が使われるようになるのは、昭和4年（1929年）の大船渡線気仙沼駅の開業で交通運輸ニーズが増したことによる。しかし、自動車はタクシー会社や運輸会社の事業が中心で、個人が自動車を本格的に保有するには相当の歳月を経なければならなかった。

大正期の乗合自動車
『けせんぬま写真帖』（気仙沼商工会議所）より

同市史によると、昭和29年（1954年）の気仙沼市内の自動車数は833台。内訳は、貨物自動車96台、乗用車はわずか31台だった。昭和35年（1960年）の段階でも総数2717台で、貨物用は978台と10倍に拡大しているが、乗用車は86台にとどまっている。

2代目の良雄氏が跡を継いだ当時は、火災保険の意識も高くなく、保険だけで生活できる状況ではなかった。そうした時代だけに、良雄氏は保険代理店を経営する傍ら、気仙沼の造船場や鉄工所などが加入する気仙沼船舶鉄工協同組合の事務局も務めていた。このことが幸いし、その後、気仙沼の主要産業である造船業や鉄工業の顧客が得意先になった。

昭和40年（1965年）に入ると、モータリゼーションの影響もあり、気仙沼市内の乗用車数は1590台と、5年前の約18倍に伸びた。自動車が地元の人の足となり、このころから自動車保険も伸びるようになる。その後、昭和50年代に入ると高金利時代の波に乗って積立保険の契約が増えた。自動車保険を付保していた契約者の中で、資金に余裕のある人が積立保険を契約するようになったのである。

気仙沼における自動車台数の変化（気仙沼市史のデータを基に編集）

単位：台

	貨物用自動車	乗用車	総数※
1954年（昭和29年）	96	31	833
1960年（昭和35年）	987	86	2,717
1965年（昭和40年）	1,590	1,590	7,557
1993年（平成5年）	4,333	16,517	34,212

※貨物自動車、乗用車含む

昭和27年ごろの気仙沼港
『けせんぬま写真帖』（気仙沼商工会議所）より

昭和40年代の気仙沼の町
『けせんぬま写真帖』（気仙沼商工会議所）より

事故対応などきちょうめんな性格で信頼得る

2代目の良雄氏はきちょうめんな性格で知られ、保険書類に埋もれながら職人技ともいえる丁寧な仕事を追究した。事故処理では、いかに素早く効率的に状況の聴取や図面取りができるかが、腕の見せどころでもあった。いったん、顧客から事故の連絡が入ると、路上で使用する巻尺を持って出掛け、現場を綿密に測定して戻り、製図用具などを駆使して詳細な図面に落とし込んだ。まさに魂を込めた職人技の事故対応だった。「帳簿も1文字間違えると最初から書き直すほど正確さにこだわった人物だった」と、現社長の雅志氏は述懐する。

良雄氏がよく相談に行ったという元保険代理店の90歳代の女性は、良雄氏について、こう語る。「温厚でとても優しい人だった」。この女性は、自宅の商売が忙しくなったため代理店を断念したが、火災保険の処理などを良雄氏に依頼したことがあるという。

また、良雄氏をよく知る顧客の一人で、気仙沼で水産加工業を行う傍ら画家としても活躍している女性は「良雄氏は保険の書き換えをするために頻繁に訪問してきた。とても優しい人で信頼があった。わたしの父は何かあると、よく良雄氏を頼っていたことを覚えている」と振り返る。

こんな逸話も残されている。昭和3年（1928年）生まれの良雄氏は、戦争に徴兵されるか否かのぎりぎりの世代だった。進路を決めるに当たり、良雄氏は兵士より無線士を選んだ。無線士ならば殺し合いの最前線に行くことはない。爆撃で死亡する危険はあったとしても、人と銃を向け合う最前線に行くことはないだろうと。その当時から、保険代理店の本質である〝人を守る〟という強い意識が働いていたのだろう。

そうした温厚な性格は、保険会社が気仙沼で支社を立ち上げる際にもはっきりと表れる。支社が成り立つためにはある程度の代理店数を確保しなければならない。そこで良雄氏は地域で保険代理店が成り立つよう、ほかの代理店に自らの得意先を提供した。自社の発展よりも、保険の普及を優先した。人をかき分けて自分が出世しようとは決して思わない人物だった。昭和30年代、保険はまだ浸透しておらず、顧客の数が宝だった時代、良雄氏は「これから絶対に保険の時代がくる」と、常々、家族にそう言っては理解を求めたという。親戚から別の仕事を勧められたこともあったが、断固拒否した。それほどまでに保険を愛し、保険に一生涯を傾けた。

自転車での営業の日々

良雄氏は、自転車で営業に走った。最終的にはバイクを利用したが、自動車を使うことはなかった。雨の日はかっぱを着て、さらに雨がひどい時は、危険なためタクシーを利用した。現在では信じられないことだが、自動車の免許を取得する時間がまったくないほど多忙を極めたからだ。時折、「免許を売っているなら買いたいぐらいだ」と冗談まじりに漏らしていたという。

漁業や水産加工業を中心に発展を遂げてきた気仙沼。しかし、その繁栄も長くは続かなかった。昭和48年（1973年）のオイルショックによる燃料の高騰、200カイリ問題による漁獲量の減少、さらに、バブル経済の崩壊や円高不況などが追い打ちとなり、気仙沼の経済のピークは昭和50年代後半以降下降線をたどり、地場産業も衰退した。大小多くの企業が経済の荒波を受け倒産する中、モリ保険事務所の保険業にも影響が徐々に及んでいった。良雄氏が事務局を務めていた組合が存続できなくなり、良雄氏も本人の意思にかかわりなく、保険業一本でいくことを余儀なくされた。

保険に全精力を傾けた良雄氏も病気には勝てなかった。平成4年（1992年）、肝臓がんのため、この世を去った。まさに急逝だった。しかし、その時点でまだモリ保険事務所に後継者はいなかった。

（つづく）

【参考文献】『気仙沼町誌』（気仙沼町）、『気仙沼市史』（気仙沼市）、『目で見る気仙沼の歴史』（気仙沼ライオンズクラブ）、『けせんぬま写真帖』（気仙沼商工会議所）